

第2回東部まちづくり戦略会議 議事録

1 開催日時

令和2年2月17日（月）15時00分から17時00分まで

2 開催場所

小牧市役所 本庁舎6階 601会議室

3 出席委員（名簿順）

山下史守朗 小牧市長（本部長）
増田 昇 大阪府立大学名誉教授
古池 嘉和 名古屋学院大学教授
大塚 俊幸 中部大学教授
和田 貴充 空き家活用株式会社代表取締役 CEO
坪井 和巳 小牧商工会議所専務理事
尾関 雅俊 こまき新産業振興センターセンター長
小柳 松夫 区長会篠岡地区会長

ファシリテーター 秦野 利基

4 欠席委員 なし

5 事務局

江口 秀和 副市長
伊木 利彦 副市長
前田 勝利 都市政策部長
鵜飼 達市 都市政策部次長
平野 淳也 都市政策部東部まちづくり推進室長
横井 久志 都市政策部東部まちづくり推進室 係長
林 亮佑 都市政策部東部まちづくり推進室 主事
長谷川 優 都市政策部東部まちづくり推進室 主事

6 傍聴人数 7名

7 会議内容

1 開会

あいさつ

2 議題

- (1) 第1回東部まちづくり戦略会議の議論の確認について
- (2) 東部地域の現況と課題について
- (3) その他

3 閉会

■議事録

【事務局】

定刻となりましたので、ただいまより第2回東部まちづくり戦略会議を開催させていただきます。

本日は、ご多忙の中、ご出席を賜りまして誠にありがとうございます。

本会議の進行役を務めさせていただきます、都市政策部次長の鶴飼でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

本日の会議日程につきましては、お手元の会議次第のとおりであります。

それでは初めに、山下市長からご挨拶を申し上げます。

【山下市長（本部長）】

皆様、こんにちは。

第2回の東部まちづくり戦略会議ということで開催をご案内いたしましたところ、大変ご多忙の中、皆様のご出席をいただきまして誠にありがとうございます。

さて、先週の金曜日に、本市の最上位計画として進めてまいりました第6次小牧市総合計画新基本計画の後継計画である小牧市まちづくり推進計画を発表させていただきました。この計画は自治基本条例に基づく初めての基本計画となっております。また、併せて来年度の当初予算についても発表させていただきました。

まちづくり推進計画の中では、本会議で議論いただいております「東部地区の振興」につきまして、私のもとで強いリーダーシップと責任を果たしながら、強力で押し進めていく重点事業を取りまとめました『市政戦略編』の中で記載をさせていただいたところであります。

この東部の会議以外、まち・ひと・しごと創生総合戦略、特に人口減少に対応した地方創生についての議論、それから、中心市街地のさらなる魅力向上・活性化の中で、中心市街地の戦略会議も議論を進めさせていただいているところであります。

小牧の特色はいろいろとありますが、東部を含めて、小牧が将来にわたって住みたい、働きたい、訪れたいと思っただけのまちづくりを進めていかなければならないものと考えております。

当初予算の関係では、中心市街地関係でもありますがけれども、新図書館は、この4月からの新年度末のオープンを目指し、また、(仮称)こども未来館については本年9月のオープンに向けて、それぞれ整備・工事費、開館準備費用を計上させていただいているところであります。

また、子育て関係では、子ども医療費の入院費につきまして、対象年齢を15歳から18歳へ拡大し、一層子育て支援を充実していくことを盛り込んでいるところであります。東部地域に関しましては、(仮称)農業公園の整備事業について基本設計費用を計上させていただいたところであります。

今後の景気動向、あるいは地方の法人税の一部国税化ということもありまして、歳入については来年度以降非常に不透明であり、減収の見込みも持っておりますけれども、限りある情勢、経営資源を無駄なく最適に配分しながら、持続可能なまちづくりに向けてさらに努力してまいりたいと考えております。

第1回の戦略会議を振り返りまして、私自身、東部まちづくりにつきまして、何とか解決していかなくてはならないという危機感のようなイメージを持っていましたが、先般の会議でも申し上げましたが、皆様方の前向きなご議論をお聞きいたしまして、新たな魅力を備え、訪れてみたい、住

んでみたいと思われるような東部地域に向けて、夢を持った、そうした振興ビジョンが描けるのではないだろうか、前向きなイメージを持たせていただいたところであります。

第1回の議論は、大変有意義でありました。本日もぜひ皆様方と有意義な会議にさせていただければと思っております。ぜひ皆様方のそれぞれのお立場、専門的なご助言等を頂戴できればと考えておりますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

以上で冒頭の挨拶とさせていただきます。

本日はよろしくお願いいたします。

【事務局】

続きまして、ファシリテーターの秦野様よりご挨拶をいただきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

【秦野ファシリテーター】

皆さん、こんにちは。

お忙しいところ、本日もお集りいただきましてありがとうございます。

先般の会議は、皆様からいろいろなアイデアをいただきまして、非常に楽しかったという印象があります。

4回ある会議のうちの2回目ということですが、その中でいろいろな人たち、特徴を持った人たちがどうやって連携を図っていくのかということところが1つのキーワードである、そんなテーブルをどのように作れるのかなという気がしました。

今日もいろいろな手持ち資料を事務局でそろえていただいておりますので、小牧の特徴も併せて理解しながら、市長の言われましたような夢のあるビジョンづくりにつなげていけるようなご意見を拝聴できればなと思っております。

短い時間ですけれども、いろんなご意見をいただくことを期待しまして、私からの挨拶とさせていただきます。

本日はよろしくお願いいたします。

【事務局】

ありがとうございました。

それでは、議題に移らせていただきたいと思っております。

以後の進行につきましては、ファシリテーターの秦野様よりお願いしたいと思っております。よろしくお願いいたします。

【秦野ファシリテーター】

それでは、議題（1）「第1回東部まちづくり戦略会議の議論の確認について」に入ります。事務局より説明をお願いいたします。

議題（1）第1回東部まちづくり戦略会議の議論の確認について

【事務局】

東部まちづくり推進室の平野です。よろしくお願いいたします。

議題に入る前に1点。

前回の会議で、農業と産業関係の基礎データが不足しているというご指摘がありました。本日は、参考資料として資料を添付させていただきました。

参考資料1「東部地域の農業の現況」ということで、こちらにつきましては、農地の分布図、農地面積、農業出荷額、農家数、後継者についてデータを取りまとめさせていただきました。

次に、参考資料2では、「東部地域の産業の現況」といたしまして、産業の分布図、事業所数、従業者数についてデータを取りまとめさせていただきましたので、またご覧ください。

それでは、議題（1）「第1回東部まちづくり戦略会議の議論の確認について」ご説明申し上げます。

資料2をご覧くださいと思います。

こちらは、昨年11月28日に開催いたしました第1回東部まちづくり戦略会議の議論の確認として、各委員の方々からいただきました主な発言と、右欄につきましては、カテゴリ別にまとめさせていただきました。

カテゴリといたしましては、基本的な考えとして、「東部地域一体のまちづくり」「柔軟性・可変性を持ったまちづくり」「地域住民による自立したまちづくり」の3つのカテゴリに分け、そのほか、生活環境・住環境などの視点を「住む・暮らす」、就業や起業などの視点を「働く」、公園などのインフラや空き家などの視点を「既存ストック」、地域資源などの視点を「資源」とカテゴリらせていただきました。

資料3をご覧くださいと思います。

資料3につきましては、このカテゴリ別に発言をまとめさせていただきました資料となっております。こちらもご覧くださいと思います。

説明につきましては資料2でさせていただきたいと思いますので、資料2をご覧ください。

それでは、各委員の方からいただいた意見につきまして、第1回のご発言の内容について確認をさせていただきます。

まず初めに、増田委員からは、『今後の東部地域全体の再生を考えると、ニュータウン周辺の農村部とニュータウンの連携を考えていく必要がある』『ニュータウンのみの「純住宅」での課題解決は困難』『「ゲスト」から「ホスト」への意識の醸成』など、今後の東部地域の振興を考える上で基本的な考え方となり得る重要なご意見をいただきました。

次に、古池委員からは、『ニュータウン周辺地域の再生と桃花台ニュータウンとの融合が重要』『桃などの資源や風景的な価値を継承していく担い手の問題』など、基本的な考え方、再生・振興していく上でポイントとなり得るご意見をいただきました。

次に、大塚委員からは、『長期ビジョン・短期ビジョンが必要』『ニュータウンというだけでイメージが悪いと思われることからイメージ戦略が必要』など、基本的な考え方や情報発信の必要性などについてご意見をいただきました。

次に、和田委員からは、『こどものまちづくりの関わり』『持続可能なまちとすることで「帰ってきたい」「子育てしたい」につなげることが重要』『女性がパート等で働ける環境、夫婦2馬力で働ける環境の整備が重要』など、女性やこどもが活躍できるまちづくりに対してご意見をいただきました。

次に、坪井委員からは、『ハイウェイオアシス、スマートインターチェンジの建設と桃などの特産品と連携させることで東部の活性化を図りたい』など、働く視点や資源の視点からの活性化につ

いてご意見をいただきました。

次に、尾関委員からは、『「生業」「働く場所」、産業振興が重要』『小牧版「CCRC」の検討』など、働く視点や高齢化に対する生活環境や住環境に対するご意見をいただきました。

次に、小柳委員から、『桃花台ニュータウンは非常に高齢化率が高く、5年先まちが存続できるのか』『大学進学の際、転出した若者は帰ってくることは極めて少ない』など、住民目線から地域実態についてご意見をいただきました。

最後に、山下本部長からは、『桃花台ニュータウンを含む東部地域全体のこれからのまちづくりを考える必要がある』『戻ってきてもらえるまち」「新たに住みたいと思われるまち」の両面で考える必要がある。さらなる魅力向上と定住促進を含めた将来像を描いていきたい』、さらに第1回の戦略会議の最後の市長挨拶にもありましたが、『明るい未来をつくり上げていくイメージの構想や計画にまとめていける希望が見えた』などのご発言をいただきました。

以上で説明とさせていただきます。

【秦野ファシリテーター】

ありがとうございます。

ただいま、事務局より「第1回東部まちづくり戦略会議の議論の確認について」という議題で説明がございました。

皆様のご発言いただいた内容をまとめたものですが、これにつきまして、何かご意見や補足される部分がありましたらご発言をお願いしたいと思います。いかがでしょうか。

【小柳委員】

今ご説明いただきましたように、皆さんに先回お話をいただいたことについては、私自身も非常に勉強になりました。

私自身の発言は、今日の状態を考えてどうかというところで、これからどうするという事に踏み込んでおりませんので、このような発言でとどまったことはお許しいただきたいと思います。

以上です。

【秦野ファシリテーター】

ありがとうございます。

ほかにごいませんか。

ほかにはないので、次に移りたいと思います。

議題（2）「東部地域の現況と課題について」に移ります。事務局より説明をお願いいたします。

議題（2）東部地域の現況と課題について

【事務局】

議題（2）「東部地域の現況と課題について」ご説明申し上げます。

資料4をご覧くださいと思います。

こちらは、第1回の戦略会議を踏まえまして、再度、現況・課題の整理を行わせていただきました。

上段で、基本的な考えといたしましてご意見のありましたカテゴリー3点を整理し、記載してお

ります。次に、下段で、資料2・資料3で振り分けましたカテゴリーに沿って、「東部地域の強み・弱み」の整理を行いました。

まず、「住む・暮らす」のカテゴリーであります。強みを①子育て環境の充実、②こどもを中心としたまちづくりとさせていただきました。弱みにつきましては、①若年世代の転出超過、②児童生徒の減少、③高齢化の進展、④買い物難民の発生の可能性、⑤公共交通の脆弱とさせていただきました。

次に、「働く」のカテゴリーにつきまして、強みといたしまして、③働く場所の存在、④桃農家などの家業の存在とさせていただきました。弱みといたしましては、⑥農家など家業の担い手の減少、⑦多様な働き方への対応とさせていただきました。

次に、「既存ストック」の強みといたしましては、⑤充実した都市インフラによる暮らしやすいニュータウンの存在。弱みといたしましては、⑧空き施設の存在、⑨空き家・集合住宅の存在、⑩空き地の存在とさせていただきました。

次に、「資源」でございますが、強みといたしまして、⑥多くの市民活動団体、NPOの存在、⑦まちづくりへ関心のある住民、⑧観光資源の存在、⑨桃などの果実、名古屋コーチンなどの特産品の存在、⑩豊富な自然環境の存在、⑪大学・企業等の存在であり、弱みといたしましては、⑪まちづくり資源の掘り起こしとさせていただきました。

次に、「情報発信」であります。強みといたしまして、⑫地域ブランド戦略の推進、⑬SNSの活用とさせていただき、弱みといたしましては、⑫地域の魅力の発信方法とさせていただきました。

最後に、「地域協働」でございます。強みといたしましては、⑭地域協議会の活動、⑮こどものまちづくり参加でございます。弱みといたしまして、⑬住民のホスト意識によるまちづくり、⑭産学官連携とさせていただきました。

続きまして、資料5をご覧くださいと思います。

現況と課題の整理を、先ほどのカテゴリーの課題の視点・取り組みの視点に分けた上で、強み・弱みを踏まえ整理を行いました。

また、根拠といたしまして、水色の網掛けをしてある箇所に、第1回での参考資料の基礎データ集や、本日追加しました農業、産業のデータを記載させていただきました。

まず、課題の視点についてご説明させていただきます。

初めに、「住む・暮らす」でございますが、視点を3つといたしまして、「若者に魅力があるまち」「高齢者が暮らしやすい生活環境」「充実した教育・子育て環境」としております。この視点の後ろに括弧書きで①や①などを記載させていただいておりますが、こちらは先ほどの資料4でご説明しました強み・弱みを整理したものを視点名に、各視点ごとに記載させていただいております。

次に、「働く」の視点では3つ、「生業の継承」「起業促進」「産業振興」としております。

次に、「既存ストック」では、「空き施設の活用」「空き家・集合住宅の活用」「未利用地・跡地の活用」「整備された・整備されるまちの活用」の4つとしております。

次に、「資源」でございますが、「人的資源の活用」「まちづくり資源の掘り起こし・活用」「豊富な自然環境の活用」の3つの視点とさせていただきました。

続きまして、下段の取り組みの視点でございますが、「情報発信」と「地域協働」としております。

まず、「情報発信」につきましては、2つの視点として、「イメージ戦略の推進」と「時代に即した情報発信」としております。

「地域協働」でございますが、「地域住民主体のまちづくりの促進」「住民・市民活動団体の育成及び連携強化」「産学官連携の推進」の3つの視点とさせていただきます。

以上で説明とさせていただきます。

【秦野ファシリテーター】

ありがとうございます。

こちらに関しまして、何かご不明な点等ございましたらご質問等いただきたいと思いますと思いますが、いかがでしょうか。

非常に多くの意見を1回目にいただいていますので、いろんな切り口から事務局でまとめさせていただきます。

それでは、これから議論に入っていきたいと思いますが、お気づきになった点で結構ですので、ご意見をまずはいただければと思います。いかがでしょうか。

【小柳委員】

先程も申し上げましたが、現状を先回のときにはお話を申し上げたということで、一番高齢化が進んでおり、自分の地域を含めて、5年先は厳しいという話をさせていただきました。

これはどういうことかという、私どもの桃ヶ丘が最初に入居した地域でございますので、今日は若者がいなくなってしまったということでもあります。

市長が提唱している地域協議会についてですが、私どもの桃ヶ丘地区が篠岡地区で最後にできた地域協議会ですけれども、昨日防災訓練をやりました。雨の中だったのでちょっと心配しましたが、実際には350名の方が集まってくださいました。

訓練としては、雨の中でも、地域の公園にまず集まって、それから避難所を開設したという連絡を各々の携帯電話に連絡し、それから本部に集まるという方法で行いました。年はとっておりますけれども、地域活動に対して非常に理解があります。したがって、私どもとしては、5年先が心配だということを言いましたけれども、高齢者が生き生きとして地域を安全・安心なまちにするという意気込みはかなり持っていると思います。

もう1つは、21名でしたけれども、本部役員と自主防災会の委員、委員長を集めて反省会を行いました。反省といっても、全員が非常に前向きな発言をしました。私は責任者でありますので、皆さんの話を聞いている途中で、本当に涙の出るような熱いものを感じて、大変うれしく思いました。そのようなこともあり、年はとって元気な姿をみんなで確認し合うことができている地域だということも申し上げておかないといけないと思っております。

また、履物を入れる袋を渡す役割や、受付やプラカードを持つ役割として16名ほど中学生も訓練に参加してくださいました。小学校、中学校の校長先生も参加していただきまして、そういう意味では地区全体で安全に対する確認ができたと思います。

訓練をしても、実際に災害が発生したときには、どうすればいいか私自身も混乱するでしょう。しかし、こういう訓練の中でお互いの顔を見る、信頼関係を結ぶことによって、例えば避難所が混乱しても、一声かければそういう人たちが中心になってまた統制することができるので、地域のみんでこれからさらにいろいろ角度を変えて防災訓練をやっていこうと思います。

5年先どうかということはこの間言いましたが、そういう面だけではなくて、極めて積極的にやらせていただいていることも事実でありますので、申し上げておきたいと思っております。

ありがとうございました。

【秦野ファシリテーター】

ありがとうございます。

高齢者の意気込みというか、そういうのが伝わってきました。

人と人がどういうふうにつながるかというものも1つ、大きな議論のポイントかなと思いますが、皆さんのお手元に参考資料1と2がついております。これは東部地域のいろんな現況をまとめた資料だと思いますので、簡単で結構ですので、事務局で説明をお願いしてもよろしいですか。

【事務局】

参考資料1では、農業の現況でございます。

こちらにつきましては、1枚目に、農業振興地域内の農用地域ということで、市全体と東部地域・篠岡地区の現状を示させていただきました。

こちらについては、農業振興地域内の農用地区域内農地ということと、それ以外の市街化調整区域内農地ということで、田畑を合わせております。小牧市内全体としては約983haで、篠岡地区につきましては597haということで、篠岡地区が大変大きい割合となっております。

また、耕作放棄地について下段で示しておりますが、小牧市全体で61.9haということでございますが、篠岡地区につきましては55.5haということで、大部分を占めている状況でございます。

2枚目ですが、市全体の農業出荷額を掲載しております。

鶏卵がかなりの割合を占めております。

(3)で農家数につきましては、総農家数では1,279戸で、篠岡地区は413戸ということで3分の1程度であります。篠岡地区の推移といたしましては、平成12年が524戸から平成27年で413戸ということで、100戸ほど減っている状況でございます。

右側にいきまして、専業農家と兼業農家の数でございますが、市全体が販売農家として402戸ですが、篠岡地区では176戸ということで、半数近い戸数が篠岡地区にある状況でございます。

(4)後継者は市全域で402戸の農家に対して、後継者がいない農家が158戸、篠岡地区では176戸に対して82戸という状況であります。

続きまして、参考資料2でございます。

1枚目に、東部地区の産業の分布を示しております。

桃花台ニュータウンの中心部に大規模商業施設のピアーレとピエスタがございます。ピアーレにつきましては、先般、ドン・キホーテとユニークピタさんの提携店を11月に改装オープンしたところでございます。

右側に、東部の地区計画ということで工業団地、こちらは市で造成しておりますが、6事業所ございます。あと、真ん中の下のところ、大草檀之上地区計画、こちらは民間で開発されました16の事業所がまとまって工業団地ということで形成しております。周辺につきましては、青色の工業系のものを示すものが多くなっている状況でございます。

2枚目でございますが、篠岡地区と小牧市全体の事業所数を示させていただきました。こちらでは、小牧市全体の約6分の1が篠岡地区に事業所がある状況であります。また、こちらの下段につきましては、篠岡地区の中で、桃花台ニュータウンとニュータウン周辺地域の事業所の業種別事業所数推移を掲載させていただきました。

右側につきましては、従業者数を掲載しており、平成 26 年の数値では篠岡地区が市全体の約 5 分の 1 程度となっております。ニュータウンとニュータウン周辺で比較すると、ニュータウン周辺のほうがかなり多くなっており、ニュータウン周辺において多いのが情報通信や運輸業、郵便業であり、中でも製造業が特に多い状況です。ニュータウンでは商業的なものしかできない規制であるため、このような状況であると考えます。

簡単ではございますが、ご説明とさせていただきます。

【秦野ファシリテーター】

後先になってしまいましたが、小柳委員が言われた情熱のある市民もたくさんいらっしゃるという中で、こうしたいろいろな資源や材料をいかに融合、マッチングさせていけるかというところが一つのキーポイントだと思うんですけども、まずそのようなところから何かご意見をいただければなと思います。いかがでしょうか。

【古池委員】

農業のデータを示していただいて、予想どおりといえば予想どおりですけど、平成 12 年と平成 27 年を比べると販売農家は 45% ぐらい減っていますし、篠岡地区で 176 戸の販売農家のうち平成 27 年の同居後継者がいる農家が 57 戸ということですから、将来の見通しはかなり厳しいと思いました。

私からみると、前回市史の話を申し上げましたけど、昭和 60 年ぐらい、高度経済成長前ぐらいまでは日本の原風景とまで言われたところがかなり壊滅的になっているのではないかと思います。

ちょっと思い出したのは、「陶淵明の帰去来の辞、田園まさにあれなんとす」という詩ですね。私は見ていないのでわかりませんが、1960 年ぐらいまでは陶淵明の描いた桃源郷にかなり近い世界がこのあたりに広がっていた可能性があると思います。

最初に確認をしておくといいと思うのは、資料の作り方を見ていてもそうですが、基本的に東部地域はニュータウン、東部地域からニュータウンを引くとその他周辺地域ということになっていきますが、全ては価値観の見方が、その他周辺地域という形を転換できるかどうかという話です。要は、よくあるのは、ジトツという黒いところに白抜きで浮かんでいるのがニュータウンだとすると、ジトツが反転していくという、時代のある種の価値観ですから、「その他」というところがかなり傷んでいるとすると、これはかなり長い時間をかけてみんなで手を入れ、過去には戻りませんから、これから先の中でこの地区の、いわゆる農村集落的自治機能を含め、どういう再生の仕方をニュータウンの人たちと一緒に作っていくかを考えていく必要があると思います。ここを置き換えられるかどうかポイントになると思います。

資料の作り方からしてもそうですが、「その他の地区」ではないのです。少なくとも都市計画マスタープランでは田園ゾーンから書いていますので、そこにちゃんと名前がついています。よく見ると、田園エリアというところの、地図がついていますけど、まさに田んぼが中心のところの部分と、果樹園、畑中心の部分と、篠岡の桃あたりか、ぶどうのあたりでしょうか。ここも山林もありますから、このあたりを「その他」でひとくくりにして、これも粗い感じがします。そういったところも、今までとは違う形で東部地域を捉え直すという気概をこの計画で示していくところが要るのか、あるいはニュータウンを何とかしましようというレベルにとどまるのかというところで位置づけが変わってきます。

一例を申し上げますと、負の遺産であるピーチライナーの高架橋の撤去ですが、あれは逆に言うと、かつての農村的な景観へ戻す非常に価値のあるプロジェクトであると思います。やはり時間をかけてもう一回作り直すという形のところへ持っていきましようという、まさに夢のあるビジョンを描いていくのか。もしくは、ニュータウンのために周辺を何とか活用しましようという話なのか、逆転させるのか、そこが非常に気になります。

逆転させていけば小牧はおそらく長い将来にわたって先進的な取り組みになるでしょうけど、それは相当な覚悟が必要だと思います。どうでしょうか、この考え方は皆さんとシェアできるのか、僕だけ勝手な適当な理想論を言っているのでしょうか。

【和田委員】

古池委員、ありがとうございます。

まちづくりというのは、今日もすごく上手にまとめていただけていますが、結構幅広いので、やはりビジョンを定めないと話がばらつくと思います。2回目なので、仮にでも、どういう方向性に行きたいんだというところの議論を深めて、一つ大きな目的というか目標を決める必要があると思います。ちょっとまだぼやっとしている気がします。

その中で僕が思うのは、今世界の目標となっているのが SDGs という、この世界共通の目標で、持続可能な社会を 2030 年までに作っていきましよう、市長もバッジをつけていますし、まちづくりもその中身に SDGs という言葉が出てきているのは、今の文脈で捉えてもすごくわかりやすいところですよ。

さっき先生がおっしゃったように、例えばニュータウンだけで考えるのではなくて、もっと広く考えれば、あの 17 項目が全て達成できるような、小牧市として取り組んでいけるというビジョンをわかりやすくできるのではないのかなと思います。

SDGs 未来都市といって登録しているいろいろな市が、たしか 30 ぐらいあったと思いますが、実際見てもそんなに何かに関して動いているという実感はまだありません。僕もいろいろ勉強させてもらって見えますけど、やっぱり実感がわきません。空き家というところで捉えると、持続可能な社会ということがイコールになってくるので、そういうのを市としてどうしたらいいかっていうのがすごく躊躇されている指定都市が多いなという気がします。そんな中で、やっぱりフィールドが、東部というエリアは、いわゆる農村もあり、住宅街もあり、工業都市もあり、全てが 2030 年に持続可能な社会を作るための実験台というのは失礼な言い方かもしれませんが、ここが最先端のまちであるよというところのモデルを何か作れるような気がします。

そのあたりを目標値、わかりやすく SDGs で示し、小牧市で東部エリアを持続可能なエリアにする、永続で発展するエリアにする、そういうのが 2 回目で決めていければ良いのかと思いました。

【尾関委員】

和田委員がおっしゃった SDGs というのは非常におもしろいコンセプトでいいと思います。ただ、やっぱりちょっとぼやとした部分があります。私は産業展開の代表ということで来ていますので、産業という視点から具体的にお話ししたいと思います。

今年の初めにトヨタ自動車は裾野工場の跡地に先端技術の実証都市を作るという構想を打ち上げました。自動運転をベースにして、AI とかロボット、そういった先端技術を使って個々の、スマートホームとかコミュニティを作っていこうという構想と聞いております。

もともとスマートシティプロジェクトといいますか、自動運転を軸にいろんな都市、豊田とか豊橋とか岡崎とか、春日井もそうですね、いろんな実証実験をやっています。もっと言えば、スーパーシティ構想というのが今また動き出そうとしていて、最新の技術を使って行政サービスや、医療、福祉などのデジタル化を進めて、一体化した先進都市を作ろうという構想もあります。

以前から、小牧市もぜひそれに手を挙げてほしいと思っていました。東部地域は、高齢化が進んでいるとか、あるいは地形が起伏に富んでいるとかいう状況を考えますと、自動運転とか MaaS は非常に有効だと思います。また、高齢化が進んでいく中で医療や介護、福祉などの行政サービスをデジタル化して、行かなくても手続できるとかサービスが受けられるという環境整備をするのが非常に有効だと思います。

私は去年からこのセンターで 150 社ぐらい企業を回ってきましたが、中小企業は、やはり人が足りないとか、働き方改革で何とかしたいという課題を持っています。デジタル化というのは非常に有効な手段ではありますが、なかなか踏み込めないという現実がございます。やはり市が新しい構想を作ることによって、実際に踏み込めない企業の背中を押してあげられることもできると思います。

これに関連しますが、最近、自動運転とか空飛ぶ自動車とか、いろいろな実証実験が行われています。春日井がこの前 MaaS の支援地域に選定されましたし、空飛ぶ自動車では伊勢志摩が採択されました。例えばそういったところに手を挙げることによって、既存の企業が成長産業に参入するという意識も高まると思います。あとは外から、国内であれ海外であれ、アナウンスメント効果によって企業も参入するという効果も見込まれますので、ぜひ東部地域で新しいコンセプトのまちづくりをするということを計画して、産業を振興して行ってほしいと思います。

もう 1 つ、冒頭に市長から農業公園の計画の話がございましたけれども、今食品メーカーは、単に製品を作って売るというだけではなく、消費者を育てようとしています。食育です。コト消費ということで、食のテーマパークみたいなところを作ってファンを増やそうとしています。農業公園も、例えばオアシス小牧と連携して、民間にも任せて、新しいコンセプトの農業テーマパークのようなものを作り、外からも人を呼べるし、住民も楽しめるという場所にしたらどうかと思います。以上です。

【増田委員】

前回も少し東部地域全体のお話をしたのですが、ちょっとお聞きしたいのですが、地域協議会ほどの単位で作られているのですか。

例えば堺の泉北ニュータウンでいいますと、南区が 16、17 万人の区なんです。そのうちニュータウンの人口は 13、14 万人で、周辺地域に 3、4 万人ぐらいいる。それが南区の中にまちづくり協議会というのがあるのです。これは、ニュータウンも農村部も含めてまちづくり協議会、まちづくり懇談会、100 人懇談会みたいなものがあるのです。一方、市の中にニュータウン地域再生室というのがあります。それはニュータウンだけを見ているのです。そのあたりの、一体どちらを見るのかという話を堺でもしています。

例えば、一体的なコミュニティが小学校区で発生しているのか、していないのか。行政はそういう見方をしていますが、堺の泉北ニュータウンの場合には既に小学校が、要するに旧村を含む小学校区と、ニュータウンだけで完結している小学校区があります。そのあたりでいくと、要するに旧村を含んでいる小学校区、あるいは中学校区のほうがある意味健全です。PTA だとかの役員なんかも、両サイドから出てきてやってくれたりしています。そういった融合の仕方があります。

1つは、コミュニティの単位で見ると、篠岡地区の中にそういう単位が実際独立された単位で動いているのか、一体的な単位で動いているエリアもあるのかどうか。それは、1つはやはり分離された単位ではなくて、一体的な単位で扱う必要があると思います。

もう1つは、参考資料2にあるとおり、工業団地があり、6事業所とか16事業所があり、ここに企業コミュニティみたいなやつがあるのかないのか。例えば、このごろの新しい工業団地だと、かなり団地全体の中でSDGsやCSR活動をやったり、あるいは工業団地そのものが海外の一流企業との連携を図るためにSDGsに取り組んだりしているのです。そういう面でいうと、ここの東部地域の中でニュータウンのコミュニティと旧村のコミュニティと産業コミュニティみたいなやつが、おのおの別々に展開していつているのか。多分過去は別々に展開していつているのでしょうけど、それを一体的展開には持っていけないのか。

例えば、工業団地にしろ、農業にしろ、いつも後継者について、悲観的状况ですねとよく言われます。私は、悲観的状况では決してないといつも言います。というのは、ご存じのように、一反米を作っていると売上は10万円です。一家が農業を継続していこうと思うと、夫婦2人とおじいさんかおばあさんの3人でやると、少なくとも1,500万ぐらいの売上がないと農家が継続しないのです。そうすると、一家庭で15町から20町耕さないといけないのです。ということは、大体2、3反しかお持ちじゃないので、水田だけでやっていると99人がお一人にお願いしますといつて農業したら、それで水田農業のニーズは維持できることになります。

施設園芸とか果樹園芸で飯を食おうと思うと、大体一農家当たり1町から2町持って、大体年収1,500万円から2,000万円ぐらいになります。そうすると、10軒のうち9軒が1人に託して、要するに1軒だけやってくればいいのです。

水田農業でいうと100人に1人、施設園芸でいうと10人に1人を育てていこうという地域の信頼性が獲得できると、後継者不足でも何でもありません。反対に、後継者が多過ぎるといいますか、要するに非常に細分化されていることが財産保有の形態の農業になっていて、農業のための農業になっていない。

そのあたりのことを考えると、いずれにしても農業エリアに関しては、スマート農業とか言われて、法人経営化していきましょと。そうすると、途端に従業員の問題が出てくるのです。今までの農家はほとんど雇用したことがなく、家族農業ベースでやってきた形態を、年収1,500万円から2,000万円ぐらいの農業形態をしていこうと思うと、雇用の問題が出てきたり、援農の問題が出てきて、それに対するニュータウンの居住者の可能性は非常に高いです。

今でも泉北ニュータウンの中で、市民農園を借りてやるというやり方もありますけど、頑張っている圃場組合は援農の仕組みを作っており、その援農者は居住者の奥さん方です。しかも、専業の方々が援農と称して播種の時期とか農繁期にお手伝いに行って、そのかわりに農作物を持って帰ります。自分の作ったやつとかですね。あるいは、自分の家の作物を販売してもらおうという、従来までの市民農園ではない関わりの中で、居住者ニーズと農業振興がある意味パートナーの関係で成立させていつています。そういう関係性みたいなやつがこの地域で作れる可能性があるのか。

多分、先ほど言った農業公園もそうで、農業公園そのものは多分6次産業化をしないと成立しなくて、生産という1次産業と加工という2次産業と、販売・レストランという3次産業で6次産業化すると同時に、農業公園を作る大きな意味は産地形成です。自給的農家とかほとんど出荷しなかった農家が、ちゃんと農業公園なり直販所を作ることによって少しでも販売農家に転換していくとか、産地形成されていくという展開をする。

もう少し突っ込んでニュータウンとの関係性のお話をすると、ニュータウンで買い物難民が発生してくると、極端なことを言うと、空き店舗の後で朝市とか定期市とかマルシェが展開することで、周辺農業とニュータウンとが連携していく。昔は、ニュータウンを作ったときに、日用品、最寄り品、生鮮食料品、これは競合したらいけないからといって、ニュータウンの中で結構朝市は嫌がられました。ところが、今はコンビニとかスーパーが成立しなくなると、そういう地元の農家と連携して、商業施設の買い物難民のところを新たな居住魅力に展開していけるようなつながりがあります。

多分工業団地なんかもそうで、ここで働いている人たちが一体どこに住居を構えているのか。かなりの時間をかけて通学・通勤しているのか、あるいはかなりの部分、このごろ非常勤、パートでもとっている部分が結構あるわけです。そういうときに、能力があつて、かつ長時間労働できない労働者や、そういう属性を持った人たちがニュータウンの中で獲得できれば企業立地にも有利です。そういう相互の連担でお互いに利用し合える資源、工業団地にとってニュータウンがどういう資源として捉えられるのか。農村にとってニュータウンの労働力はどんな資源として捉えるものなのか、あるいは商売先として、農産物を買ってもらえる先としてどのぐらいの資源として捉えられるのか。そのような見方をすると、どちらかという東部エリア全体をどのように発展させていくのかということにつながっていくのが、前回お話しさせてもらった延長線上なのです。そうすると、お互いに周辺地域とウィン・ウィンの関係というか、お互いの欠けているところをカバーし合えるような仕組みができないかみたいなことを考えるという視点で展開されたら、古池委員とよく似ているのですが、ほぼ同じようなことが実現していけないかと思います。

【秦野ファシリテーター】

すばらしい示唆だったと思います。

【坪井委員】

先ほど古池委員、増田委員もおっしゃっているように、全体をどうやって捉えるか、もしくはニュータウンだけの問題にするかで、議論が変わってきてしまう気がします。この資料をめくっていただいて、例えば農業もあるので朝市とか、それはすごいいいアイデアですが、実際に農家が減っていらっしゃる、それから耕作放棄地、もう農業しないというのが増えているということです。人間は誰も楽しみたいと、農業は天候にも左右されますけれども、意外とリターンが少ないということで、全体的にやっぱり農家離れという傾向が多いです。

農業の出荷額で鶏卵が一番多いです。鶏卵といっても、これは事業でやっていらっしゃる会社だと思われま。ですから、これだけの細かい土地があつても、事業としてやっていかないと多分農家は立ち行かなくなる、これは増田委員のご意見と同じだと思います。

図面に商業利用地が赤く落としてありますけれども、この桃花台の中で、もし車がなかったら買い物にも行けないのではないかと思います。もっと点在すればいろいろ生活もできる。ですから、まず、働くということももちろん大事ですけれども、生活するには車がないと不便を感じる状況です。先般、公共交通機関が脆弱だという話が出ました。ですから、そういったところから少しずつ改善していくというか、整備していくことで全体的に変わるのではないかと思います。

それから、桃花台ニュータウンというのは、高蔵寺と比べますとちょっと高級なニュータウンという記事を見たことがあります、実際価格とか建物とかがきつとよかったのではないかと。ですか

ら、それに見合った都市交通の整備とかをしていかないと、せっかく高い買い物をしてここに来たのにちょっと残念だなということになってしまうのではないかと思います。

以上です。

【山下市長（本部長）】

大分議論が広がっている感じがします。それぞれのご意見は非常に興味深いのですが、田園風景の話から SDGs の話から産業の話までかなり広がってきています。そろそろちょっと交通整理しておかなければいけないと感じました。今お聞きしながら、議論が非常に広範囲に広がっていると思って、ちょっと私、口を挟ませていただこうと思います。

まず、この桃花台でありますけれども、先ほど古池委員の話のところから始まっていると思うのですが、ニュータウンとその他という資料の作り方の話があったのですが、その他という書きぶりにはなっていないと思います。便宜上ニュータウン、それからニュータウン周辺ということで統計を分けさせていただいたということではありますが、これはどちらが主とか従ということではなく、今回東部ということで、篠岡地区と我々言っていますが、この東部地域全体の振興を考えていかなければいけないということで、まず東部まちづくり戦略会議という設定をさせていただいたということをもう一回確認させていただきます。

そういう中でスタートしているのですが、第1回の議論のときに、増田委員から、桃花台ニュータウンは純住宅という諸外国と比べると日本のニュータウンの特徴というお話がございましたが、この純住宅だけで問題解決するのはなかなか限界があるとのことでした。周辺との連携はよく考えていかなければいけないというご意見も頂戴いたしまして、それもそうだなということを私も思います。

そういうことで、今の議論は、桃花台ニュータウンとしての特色、特徴がある中で、周辺は周辺という。どうしても二元論がありながら、それをどう一体的に結びつけて、全体としてよりよい、暮らしやすい魅力ある地域にしていくのかという議論がなされている。その中で、それぞれの視点の違いで農業や産業、子育てなどいろいろな議論が出ているのかなと理解します。

先ほどお話が出ましたけれども、篠岡地区というくくりの中で、小柳委員にご出席いただいておりますけど、小柳委員は桃花台の区長会もずっと代表でやられており、桃花台ニュータウンができた経緯、それから住んでおられる方との一体的な気持ちがあるので、桃花台は桃花台として活動を今までやってこられた部分があります。桃花台ニュータウン内の4小学校は、桃ヶ丘小学校以外はニュータウンと周辺地域から児童が通っています。

地域協議会については小学校区単位で設立しております。増田委員からお尋ねもありましたのでそれに対するお答えにもなるかと思います。市内16の小学校、9の中学校がございますけれども、議論をいたしまして、基本は小学校区単位がいいのではないかとになりました。

自治会の話もしますと、市内全体で129区あります。現在の小牧市では、行政である市との連携のメインは自治会区になります。3世帯ぐらいまで減っている区もあれば、1,500世帯を超える区もあります。これからの高齢化を見据えた中で、特に子どもや高齢者が、防災や防犯などさまざまな活動をするのに、自治会単位でできているところもあればできないところもあるので、中間組織として1つ、小学校区単位ぐらいでまとまりを作ったほうがいいのではないかとということから進めてきております。16のうち11まで地域協議会が設立されまして、東部地域においては昨年桃ヶ丘地域協議会が設立されて、すべての小学校区において、地域協議会が設立されている状況というこ

とになります。

公共交通では、小牧で最初に自動運転をやれるのは、インフラがしっかりしている桃花台であると私も思います。

そうした中で、今回の議論の始まりはニュータウンを抱える東部地域においては、同世代の方が一気に入居されていますから、急速に進む高齢化に対応することではないかと思えます。非常に地元の皆さん方から心配だという声大きい。そして、こどもたちも急速に減ってきている。人口流出も社会減もある状況の中で、高齢化が急速に進んでいく、農地が減り、空き家も出てきている、これからさらに進行していく状況の中で、さらに農業も、耕作地も広がっていく。小牧市は、都市型、都市近郊型の、ほとんど兼業農家という状況で、もちろん専業でやられる方もお見えでしょうけれども、そういう状況の中でどうするか。

いろいろな問題がありますが、基本的にはそういった背景の中でいかに持続可能で、将来も空き家が発生せずに、そして住み続けることができるか。また、新しい人に入ってもらわなければいけない、新陳代謝も必要だろうという問題意識の中で、議論をスタートさせているという状況であります。

ではどうしたらいいかという、これから10年20年30年先に、人口が減少し、高齢者が増加し、空き家が増え、そして人口流出もとまらないという状況の中で、店舗も撤退し、買い物するところもなくなり、本当に住民が暮らしにくい状況になってしまう。コミュニティも成り立っていないという状況にならないようにするにはどうしたらいいのかということ、将来を見据えて、もう一度魅力ある桃花台、そして篠岡に全体として住み続けたいと、あるいはもう一度戻ってこようと、あるいは10年20年30年先もみんなが暮らしやすい環境にしていくためにどうしたらいいかということについて、いろいろな観点からご議論いただきたいと思っておりますので、そのあたりお話をさせていただきました。

あと1点だけ。公共交通の話がありましたが、これ、まち・ひと・しごとの中でも議論になりますが、公共交通の脆弱性ということをおっしゃったときには、主に鉄道です。東部地域には鉄道がないのです。隣町を見ても、春日井とか岩倉、犬山との人口の流入・流出が結構あります。もちろん名古屋ともあります。ただ、そういった中で、どうしても名古屋へ直接鉄道で行けないのです。小牧の鉄道網は真ん中に名鉄小牧線が1本走っているだけです。そういう意味で公共交通の脆弱性というのは名古屋都心へのアクセスが脆弱だということを主には言っています。だから、若い人たちが、名古屋とかで買い物したり、いろいろと行きたい施設がある中で、そういったところへのアクセスが不便だということで、なかなか小牧に新たに転入してもらえないということについての悩みがあります。

ただ、市内交通という意味でいけば、小牧では19コースコミュニティバスを走らせてきておりますので、市内の病院だとか買い物施設とか公共施設へのアクセスという意味では、便利とは言いませんが、全国他市町と比べれば、行政がお金を出して相当程度カバーしています。そういう意味で、どこも行けないということは現在はないと理解しています。将来どうしていくかということ、自動運転も含めてこれから考えていかなければいけないと思っています。

いろいろな議論に広がっていましたが、私なりに軸を戻させていただくことも含めて話をさせていただきました。よろしく申し上げます。

【小柳委員】

私は、いろいろなご意見がありますが、市長の最初のお話の中で、駅前の整備をされている、あるいは図書館の建設をされている、さらには市街地再開発のビルを活性化するための方向づけをされている。これは、中心市街地としての役割を果たそうと思って、画期的なことをやられていると思っております。

さて東へ行くと、これは坪井委員から出ましたけれども、ハイウェイオアシスとスマートインターの計画が着々と進んでいます。東の中央道路のところにそれができると、東の発展というか大きな起爆剤になるわけです。これは、私は一昨年の10月17日に篠岡地区の区長33名おりますが、32名の署名捺印をしていただき、市長に要望させていただきました。市長もそれを受け取って、今日さまざまな方向づけをしていただいていると思っておりますが、これができると大変大きな東部の活性化の起爆剤になるのではないかと思います。

もう1つは、地域の関係です。21・22日は篠岡区長会で大阪と神戸の防災施設を見学に行きます。区長会としては、桃花台23名と周辺の方10名とは極めてコミュニケーションがとれている状況です。

もう1つ、農業をやられている方とも話をしますが、私のところは若い衆がきてくれませんのでやめようかしらという声が聞こえます。その辺をどうするかということになってくると思うのです。私どもは桃花台23区を一つにまとめて、それだけでいいという思いは決してありません。周辺の区長さんともよく相談しています。

桃花台に居住できたのは、その土地を分けてくださった周辺の皆さんのおかげだということを、私は住民に対して言い続けております。「飛行船」という冊子がありますが、これは年に4回発行しており、桃花台センターが30周年を迎えることから、理事長と市長と私の挨拶を載せていただきました。その中にも、周辺の人たちに対する感謝の気持ちは重要であり、今日もなおそのことを忘れていないということを書きました。そういう立場、気持ちで周辺の住民の皆様とは接していかなければならないと思っています。

桃花台の中をどうするかということですが、7月の終わりか8月のはじめに「桃花台まつり」をやります。これは2日間、区長会の手作りでやります。1軒当たり650円集めて、全体でやりくりして700万ぐらい使います。これは市長にもお出かけいただいて激励のご挨拶をいただきますが、このまつりには、私も最初からかかわってきたので、これは継続していかなければいけないと思っています。

特にこれをやるときには、日本は本当に少子化なのかと思うほど、こどもたちが周辺からも来ます。実は春日井からもいらっしゃるのです。なぜかというと、私の隣とまたその隣にも春日井の学校の先生がいて、その教え子が来ていたというお話でした。桃花台でやりますけれども、周辺の区長さんにもご案内差し上げていらしていただくなど、そういうことも含めて結束していくことをしています。

全国どこでも人口が減っています。桃花台が減っている、東部が減っているだけではなくて、実際には限界集落なんか2万を超すぐらいの状況になっているとも言います。

もう1つは、非常に外国人が増えましたので、地域協議会の活動の中で多文化共生のテーマを1つ入れようと、来年度の計画の中でもテーマとしていこうと考えています。大したことはできませんが、小学校、中学校と協力して、そこに通う父兄の方に呼びかけて、お茶を一杯、菓子をつまんで、ここに住んでどうかという話し合いの中から前へ一步一步進めて、やがてはワンチームになるようなこともできればいいなと思っていますし、それを実現するために努力したいと思っています。

ありがとうございました。

【大塚委員】

先ほど市長がおっしゃられたことに関してです。ファシリテーターの方からの、市民パワーを生かしながら地域資源を活用していくにはどうしたらいいか、という問い掛けに対して、最初は全然そういう話になっていかないから大丈夫かなと思っていました。しかし、増田委員のお話を聞いてはっとしました。いろいろな方面からの意見が出ていますが、それをつなげて考えていくと、一つの形が見えてくるのではないかと思います。実は、皆さんのご意見をつなげると、いいものが作れそうだなと感じながら聞いておりました。

この現況と課題の整理の資料はよくできていると思います。網羅的という話がありましたが、網羅的にならざるを得ないのかと思います。網羅的にいろいろやっていく中で、市長が一番気にされているところの答えというか、解決策にもつながっていくのではないかと考えて話を聞いていました。

もう1点が、名古屋都心へのアクセスです。やはりバスより鉄道というのがありますが、この場合、桃花台から名古屋の都心へ行くのに高速バスを利用されている方がいらっしやると伺っています。そこで、これを強化して、この地域の売りにできないかと思っています。例えばピーチライナーの旧車両基地用地を利用し、鉄道の駅前ではありませんが、高速バスの停留所を東部の駅前とするなど。しかし、そうすると都市や地域の中心がぼやけてしまってよくないかもわかりません。そのあたりについては、よく考えなければいけません。ただ、コストのかからない1つの方法として可能性はあるのではないかと考えております。

以上です。

【山下市長（本部長）】

高速バスについてはまさにそのとおりで、私も実はすごくそのようなことをこれまで感じてきました。就任してからまず桃花台で手がけたのは、中央自動車道、高速バス停の上にピーチライナーの本社と車両基地があったことから、そのロータリー整備をやりました。自転車置き場を整備したり、時間貸し駐車場を整備したり、防犯カメラをつけて安全確保したり。まさに私の思いも、あそこは一気にやりたいと、あそこから高速バスに乗れば中央自動車道上の高速バスで名古屋までアクセスがいいということもあり利便性を向上させていただきました。

まだ桃花台の人たちもそんなイメージがないので、あそこを1つの駅的なイメージにしていくというのは非常にいいアイデアじゃないかなと私自身も思っています。

【大塚委員】

その際に、桃花台の人がみんな名古屋に向ってしまって、小牧の都心に目を向けなくなってしまうというところがちょっと気になります。

【増田委員】

先ほどの市長の話で、住み続けるという話についてですが、ちょっといいですか。

多分、先ほどの交通問題にしる、住宅政策にしる、今住まれている方が「終の棲家」として気持ちよく住み続けられるという視点と、新たな居住魅力で新たな居住者を呼び込みましょうという視

点は、ある意味全く違う政策論であり、ある意味共通する政策論です。極端なことを言ったら、名古屋に出る・出ないというのは新たな居住者の魅力であって、内部で住まわれている方がだんだんこれから免許を返納して、歩くという行為の中で気持ちよくこの地域で生活するためにはどのような交通政策が要るのかと。必ずそうやって見ていかないといけないということです。

だから、空き家についても、基本的には、やはり今までのまま進むのではなく、空き家が発生したときにどんな人が住むかと。例えば泉北ニュータウンなりいろいろなニュータウンの中でコミュニティビジネスをやりたいという若者層が出てきています。大きく儲けなくてもいい。その地域、小学校区の皆さんがコミュニティ活動をするのにだんだん疲れてきたときに、その事務局的機能を請け負って、まちに住みながら今あるコミュニティをサポートすることによって、ある一定の生活費を稼ぐ、有償ボランティア的な活動でサポートするような居住者層が出てきているのです。

そういう面でいうと、空き家の活用とか空き家の流通については、従来までの都心通勤者という形も必要ですけど、もっと地域貢献型の新しい居住者像みたいなものとか、ここの桃花台ニュータウンあるいは東部地域に居住しながら、「住む」という行為と「働く」という行為を同一型で展開していくという新たな需要層をここの中でどうつかまえていくか。少しコミュニティの面倒を見るのに力が弱ってきた、あるいはこれから弱っていく、それをサポートすることが居住魅力につながると、一体化が生まれます。

対象が、新たな居住者と旧の居住者がいらっしやって、別々の話の部分とお互いに補完することによって新たな居住魅力になる部分の両方ある。だから、農業政策をダイレクトに実行せよという話ではなく、農業は農業の展開論があって、ニュータウン政策論の中では違いますけど、農業で欠けている部分とニュータウンで欠けている部分を融合させたらお互いの魅力になり、お互いの向上につながらないか。そんな視点で見たら、何も新しい居住魅力をどう生み出そうかという議論ではなくて、むしろ今ある生活課題を新しい居住魅力という形で解決していけないかみたいな視点でまとめていかれたらどうでしょうかということです。

【山下市長（本部長）】

前回もそうでしたけど、非常に興味深いお話で、まさに希望が見えるようなお話だと思ってお聞きしています。全くそのとおりでなと思います。

私、さっき3つ言いたかったことがあります。

1つは、最初に古池先生がおっしゃったことで、農村において「反転」という話がありましたけど、農村の魅力をどう生かしていくのか。全体として、桃花台ニュータウンも含めて。これを新たな、昔に戻るといってはなかなか難しいかもしれませんが、いわゆる農村のよさを桃花台ニュータウンに含んで全体を再生するという話は、そういうことが可能であるならば、それは1つの論点じゃないかなというのを実は感じています。

もう1つ、これも前回の議論からずっと私は興味あるものですが、今の農村と連携をして、いかに全体として魅力を高めていくか。この論点は非常におもしろいと思います。

もう1つは、空き家とか空きスペースが出てくれば、それは新しい可能性を生み出す土地だという議論が前回ありました。ニュータウンの中は、土地利用の規制が厳しい。その議論にもつながっていきませんが、純住宅あるいは商業施設は一部に限られている中で、空き家が出てくる、空きスペースが出てきたときに、まずはニュータウンにおける話をさせていただきますが、ニュータウンの中で何が不足しているのか。何が先ほど増田委員のお話の中にありました新たな魅力になるか。

あるいは、「終の棲家」としていくには何を考えないといけないとか。今後、人口が減って空き家や空きスペースが出てきたときにそれをどう活用していくのか。新たな可能性だというお話があったので、それをどう展開していけば、理想の形につながっていくのか。この辺の議論が一つ大きい。それは都市計画の問題など、いろいろな議論が必要になると思われるので、市としてはその議論をさらに進めていきたい。

もう1つは、住民主体のまちづくりということも1つの論点でありますけれども、私のイメージとしては、桃花台ニュータウンは都市基盤が非常に充実しています。歩道や緑地は非常にきれいに整備されており、自転車道があれだけ整備されているのは小牧の中では桃花台ニュータウンぐらいです。信号、交差点を通らずに学校まで行けるといって、非常に安全な都市基盤が整備されています。

非常に温かいアットホームな住民のコミュニティの受け入れ体制があるような活動を内外に発信していけば、ここに住みたいなという良いイメージを持っていただけると感じています。また、ニュータウンと聞いたときの悪いイメージじゃなく、いいイメージに転換していけるのではないかなということも、皆さんの議論を聞いて実は感じているところです。そういった方向性にできないのかなと。

私としてはそのような論点に興味があります。

【秦野ファシリテーター】

今の皆さんの話を聞いていると、純住宅の政策を今までとってきたけど、それにはもう限界があると感じました。高齢化もあるし、いろいろなインフラもある。緑道も整っているため、非常にいい住環境も継続している。その中でさらに空き家も出てきているので、どんなコミュニティビジネス等ができるのか。それに関して、どうしても純住宅という政策を少し見直す必要も出てくるのか、ないのかわからないですけども、そういったことも議論する必要がある。

ただ、その周辺の材料には、農業とか産業といった要素もかなりあるし、市民活動団体やNPOも、周りにいろいろやっけていらっしゃる方も多い。その中で、どのように連携をとって若い人たちが入ってこれるようなまちづくりをやっていくのかということだと思います。

ここから先の議論をしたいと思います。あと30分ぐらいしか時間がないのですが、この話の一步入ったところで、例えばこういう大枠でこんなまちづくりの色を出していったらどうかみたいなものも含めて、皆さんからご意見いただければと思います。

【和田委員】

結局、結論として「誰を呼びたいか」ということではないかと僕は思うんですね。誰にここに来てほしいか、それによって政策や施策は変わってくると思います。

要は、関係人口を増やすのか、定住人口を増やすのかというのももちろんあると思いますが、定住人口を増やしたいとしても、ここで住みたいと思うまちになっていないと来ないわけです。住みたいと思うまちがどうであるかということを決めるのは、住みたいと思う人であり、受け入れる側、もしくはまちづくりしていこうとする側がどういうまちで小牧市の東部エリアをこういうふうにしていくんだという明確なビジョンを持ってそういう人たちに声かけていくというか。それを、この小牧エリアの近隣都市だけではなく、日本中、世界中に呼びかけるという意思表示をしたら、ここに来たいという人たちが来るのではないかと。

では何かというと、先ほどの農業でもいいと思います。なければ作ればいいと僕は思います。例

えば、前回も言いましたが、三菱重工業があるのであれば宇宙関連のベンチャー、宇宙関連に興味のある人がここに来ていろんな研究ができ、いろいろな仲間がいる、いろいろな人たちが住んでいて、コミュニケーションがとれ、しかも、もともと住んでいる人たちもそれを理解し、どんどん受け入れてくれる状況ができていくという、どういうまちにしたいかということが結構重要なのではないかと思います。

だから、ここでいうモデルエリアみたいなものになってくると思いますが、農業でもいいし、宇宙でもいいし、例えば市長がこういうまちにしたいんだということが明確にあるのであればそれでもいいと思います。もしくは、桃花台エリアの人がどういうまちにしたいか。この前も言いましたように、子どもたち自身が住み続けていきたいまちにしたいとしたときに、未来も住み続けようと思う子どもたちがこういうまちづくりをしたいということがより明確になれば、それに共感する人たちが集まってくる。

住みたい人であったとしても、例えば関係したい、そこでビジネスをしたい、先ほど増田委員がおっしゃったようにコミュニティビジネスをしたいと思う人たちもそうだと思います。その辺がふわっとしてしまえば、二の足を踏んでしまうというのは、会社でもそうです。ビジョンがないと結局どこに行ったらいいかわからないみたいなことになってしまうので、今あるコンテンツももちろんそうですが、さらにどういう未来にしていきたいかというビジョンをもとに、例えば農業に特化したまちづくりをしていきたいということであれば、そういう人たちを呼びやすい、そういう人たちに来てもらいやすい環境にするということなのかなと思います。

例えば農業でも、衛星を使つての自動農具などは今どんどん研究されているんですけど、それを思いっきり開放してしまうとか。勝手に言ったら怒られるかもしれませんが、農家の方も先ほど言ったように耕作放棄地ができて、農家が次の世代に相続できない、やってくれる人がいないというのであれば、そういう実験ができる場所だよという特区にしてしまえば、そういう人たち、そういう場所、そういう会社、ベンチャー、研究したい人に来てもらうというのは意思表示だと思います。そういう本当に小牧市が持っているコンテンツカラーなのか、新たに作り上げるのかという、どういうまちにしたいかということで人が集まってくるのではないかな。それぐらいとがったものが必要じゃないかなと思います。

【古池委員】

最初に反転と申し上げたのは、反転させないとおそらくニュータウンのよさが引き出せないという意味です。要するに、今までの延長線上で議論したときに、ニュータウンの行き詰まってきた価値を反転させると、周辺との絡みでニュータウンの魅力が引き出せるので、そういうことが必要だと思います。

僕の中では、第3回戦略会議に向けてかなりクリアに整理できていますが、それは増田委員が言われたように3つのコミュニティ、全くキャラクターが違ふと思われているコミュニティが東部というエリアの中に現存して、今どれくらいコミュニケーションがつながっているのかという、現状どこまで来ているのかというのがもう少し正確に知りたい。その上でどことどこをつなげていけばいいのかということの、コミュニティ間で独立し完結したコミュニティの中だけだと問題解決はできないので、お互いにどのように分かち合っていくと魅力が高まるのかという方向性を議論すればいい。そこの、アイデアを幾つか出していけば、ほぼほぼ結論に達するという気がしています。

要は、そこの3つのポイントの中で、資源的に再評価すべきなのは、農村の中にもう少しきめ細

かく、現地に行ったり見たり聞いたりしなければいけません、可能性だけでいうと農村の文化資源。ここの中にももう少し評価すべきものがあるような感じがしていて、そこを議論することによって、そこの関係でニュータウンのこれからの行く末の方向性が見えてくるという気がしています。

その3つをコミュニティの中の、どこどこをどのように既存資源をシェアしながら、仕組みとしてつなげていくことをサポートしながら、何年後かにお互いのシナジーが生まれるようなビジョンを描けば、ほぼ見えてくる。ニュータウンと農村集落と工業の3つが現存しているので、その3つをどうやって絡ませていくかということだと思います。

その中で、公共政策として農業公園、これも場を作るのであれば、そこでどんな仕組みで3つをつなげるかがポイントになる気がします。工業地域までいけるのかどうかあれですけど、理想的にはそういう場の中にどういう仕組みが組み込まれていて、そこがつながっていくようなことで実現できる公共政策ならすごく意義があるでしょうし、そこがインプットされていない公園だと意味があるのかどうかあれですが。

その資料を基に、あとはアイデアのディスカッションができる。それでやっていくと、僕の中では整理がついています。

【山下市長(本部長)】

いろんなアイデア、ご意見をお聞きしているので非常に勉強になっています。今の話も和田委員の話もそのとおりだと思います。

私が市長としてどういうイメージを持っているのかという話がありましたが、私のイメージでいくと、「働くところがない」と「住まない」というのは、これは全国の地方創生はそうですが、基本的にこの東部のエリアを見ても、小牧の周辺、小牧市内も市外もそうですけど、働くところはあると思っています。この地域について働く場所をまず作らなければいけないとか、働く場所がないから住めないとかいう議論は多分ないと思います。あくまで私の意見ですが、それは大丈夫だと思っています。

都心でもない。都会住まいしたい人は名古屋に住む人がいるかもしれない。でも、完全な田園風景が広がっている農村でもない、ある意味でいうと中途半端ですが、小牧は都市近郊であります。その中でも、この小牧の篠岡地区は特徴的なところだと思います。ニュータウンがあつて、ニュータウンに住んでもいい、あるいは周辺の篠岡の旧来のところに住んでもいいですが、桃花台は都市基盤が整った非常に便利な、住環境としては非常に整ったよさがあります。先ほど価値反転の話もありましたが、便利さもあしながら農村のよさも味わえて、ちょっと歩けばそういった景色が広がっていて、またこどもを連れて散歩もできる。

子育て世代など、家を購入する世代をターゲットにしながら、やはり都市基盤が整っていて、そういう暮らしもでき、いわゆる田舎とか田園というものと同じエリアにあるというよさもあります。

休日には自分のところで畑を耕せたりすることが可能なのです。市民菜園もありますし、いわゆる耕作放棄地もあります。これまで、周辺の皆さんとニュータウンの皆さんが育ててきたコミュニティもあります。その良さをさらに引き出していけば、新しい価値とか魅力を今の材料で作れるのではないかと。今までの皆さんの議論を聞いてそういう意を強くしました。そういうイメージの篠岡の中でここに住むと、まず子育てしやすいし、都市基盤が整っているし、学校まで安全に行けるし、もっといえば水道が安いし、遊ぶところは四季の森もあればホテルもいるし、プール

もあるし、農業もできるし、どこか働きに行っても休日は家族と田園暮らしもできるということで、いいところを押し出していくことが十分可能ではないか。そこにニュータウンというのは、排他的ではなくて、むしろ受け入れるような文化的なコミュニティを住民の皆さんと一緒に作って発信していけば、子育てしに来ませんか、こういうことができるのではないかと。これは私の今の思いです。どうでしょうか。

【増田委員】

半分賛成で半分違うと思います。

何が違うかという、泉北ニュータウンも全国のニュータウンも、緑道網が発達していて、緑被率なり公園率が20%です。これを良好な居住環境だと言い切ってきたわけです。ところが、必ずしもそれが価値化されているかという、価値化されていないというのが今の認識です。あるいは周辺部に田園が広がっているというのは、ポテンシャルとしてはあるけれども、それが顕在化していないという認識を持たないといけない。

どんなことを泉北ニュータウンでやっているかという、緑道があつて、要するに昔は社会情勢もよかったので、緑道イコール安全な通学路、安全な通勤路という価値でした。今はどういうことが起こっているかといったら、痴漢注意となっている。昼間の健康、運動づくりにはたくさん利用されているのです。ところが、早朝とか人目がなくなると途端に痴漢注意の場所にかわる。公園も一緒です。非常に緑が大きく育って、それが居住魅力だと机上の論理ではみんな言います。ところが、それは本当の意味で顕在化しているかといえば顕在化していない。

したがって、今はどんな運動をしているかという、この3月1日も実施しますが、緑道ピクニックみたいなことを仕掛けている若者たちや、公園でチャレンジショップをやりたいと言って若者たちと一緒に公園、緑道を利用した再生づくりをやっているんです。緑道ピクニックというのは、ちょっと寂しいスペースのあるところでカフェをやってみましょうとか、ワゴンショップをやってみましょうとかいうものです。それをできたら、週末型から平日型まで展開していかないと。まずは、土日の年間50、60日だけ出店する。そういう形で、基本的には今ある自然環境が生きて、私もずっとニュータウンを自分自身でも作ってきましたので、普通のまちで2割以上の公園緑地があると、道路まで入ると5割が公共用地であると、非常に優れた社会基盤を持っている、都市基盤施設を持っている。だけど、それが本当に魅力につながっているのかどうか。そこに魅力という要素を入れるためのインターフェースとしての住民活動とかいうのが入ってくると、初めてそれが顕在化します。

ここの話の中では、おそらくそれを顕在化する仕組みを考えていきたいと思いますということがポイントになります。例えば泉北でやっているのは、いろんな人がチャレンジできるニュータウンに変えていきたいというもの。若い人がチャレンジできる場所に変えていかないと、今のままだったらジリ貧だという、そんな視点で何か捉えられないか。

もう1つは、近隣センターも従来型の商業施設は成立しないのです。だから、どういう近隣センターに展開してほしいかという、よろず屋だと言っているのです。これはまさに住民運動から出てきたのです。キーテナントが出ていって中小のスーパーが入らない。その後、委嘱したのは特養の施設をする社会福祉法人です。商業難民が出るので、地元から徹底的に反対があったんです。その特養の経営者は非常に柔軟な人で、それだったらよろず屋をやります。特養施設の下に毎日朝市みたいなことを自分らでやるし、高齢者が立ち寄れるコミュニティカフェをやるし、こどものため

の読み聞かせ会も定期的に行います。特養施設だけど商業施設でもあり、コミュニティサービスでもあるという、そういうよろず屋的機能で展開していきますよみたいな若い経営者が出てくる。

そういうことをしていくと、居住者にとって不足している部分と、新たなチャレンジをしたいと思っている若い人たちのエネルギーとどうマッチングして、終の棲家だとおっしゃっている方にサービスしながら新しい居住魅力をどう持ったまちにしていく、そんな視点があったらかなり前に進むのではないだろうか。具体的に言うとそんなことです。

ずっと私も緑地計画みたいなことをやっていて、公園緑地がいっぱいあっていいでしょう。子育てが活性化していて、一家族が3.5人とか4人の家族形態のときには、放っておいても公園って利用されたのです。今はそうでない状態です。それは魅力としてもう一度何らかの意味で、インターフェースでそのように読みかえてあげないと本当の魅力とはならない。読みかえたいという若者層が結構出てきている。

商業施設の展開もそうで、泉北で若い人たちに魅力ある拠点を探してください。今までだとニュータウンの中でしか探さなかった若者層が、ニュータウンの施設はどちらかという伝統がないとか個性がないとかいう話があって、村の中の変った店舗、ちょこちょこチャレンジされている店が旧村の中にあるんですね。それもニュータウン政策と連携してやったら、皆が選択性を持った地域にかわっていくのではないかと。そのような話もやっていくと、今おっしゃっているような形で何かチャレンジできるテーマとか、あるいは働く場所があるけど、職住分離型、要するに家と居住者ではなくて、職住同一型なり、職住近接型みたいな人にとって非常に暮らしやすいまちに転換できないかと、そのようなことも1つだと思うのです。

【和田委員】

増田委員がほとんど同じようなことをおっしゃったのであれなんですけど、市長がおっしゃるのはすごくよくわかります。

僕も大阪の箕面市に住んでいるので、山林がたくさんあります。だから、遊びに行こうと思ったらいつでも遊びに行けるのですが、住んでいる人は行きません。来るのは中国の方、外国の方がたくさん来ています。箕面大滝は有名なので来ているのです。そういうところがあるというのも1つだと思いますが、この桃花台は暮らしやすい、すばらしいところで、農業もでき、何でもできて非常にいいよねと思います。よそでもその環境あるよねというふうになってしまっているのがすごくもったいない。

ここまで市長が何とかやっついていかないといけないと言っているのにもかかわらず、小牧市のこの東部地域でないとできないことが明確に打ち出されていない。例えば土日農業をやりながら、これができるまちですよというふうに、本気でこの地域をやるんだよというふうに言えば、それを思い切り打ち出せばいいと思います。そうすると、周りはそれをやっていないので、同じように見えるかもしれないですけど、これはもうブランディングで出したもの勝ちだということもあると思います。このブランディングで全国から、例えば外国の方とかも世界から集まってくる。

外国人の方って自分たちのコミュニティを持っています。例えばフィリピンの方でもブラジルの方でも、ベトナムの方が最近増えていると思いますけど、彼らは自分たちのまちが住みやすいよとなったら、フェイスブックでこのまちに住もうって、みんな来るのです。これはいいことなのかどうかわからないです。ただ、これはみんなが知らないコミュニティなんです。そのベトナム人のコミュニティだけで何万人というコミュニティを持っているようなフェイスブックのグループがあ

って、そこで小牧市がいいよとなれば、みんな住みたい住みたいって来るわけです。

要は、こんなまちでこういうことができるっていうのをわかりやすく、端的に皆さんにブランディングをして出していく。だから、先ほど言った土日農業できます、例えば平日は安全に暮らせませす。しかも、僕は農業でも絶対にベンチャーを呼んだほうがいいと思っていますが、起業したい、もしくは起業もできるし研究もできるし、そして働き方改革なので副業で農業の何か新しいチャレンジができる。例えば、今は缶詰工場なんか安くできるわけです。自分たちの小ロット小生産で桃などを缶詰にして、全国に高く配信していくというサービスをやっている会社もある。それで起業するのは不安があるが、平日は名古屋で仕事をしながら、土日は産地の商品を使って缶詰にして、これを全国に売ると。いろいろな缶詰がありますが、それのもとになっているのがこの桃花台というエリアなんだと。

だから、桃も売れば、いろんな商品を作って、缶詰にして送るとというのが、これも副業ベンチャーみたいな形の策を打つというふうにすると、それをやりたい人が集まってくる。関係人口から定住人口になる。若い人たちが来て楽しめるスペース、空き家もそういう人が住めばいいわけです。

空き家の問題は、また所有者の今後どうされていくかというのがありますけど、入り口側でいえば、やっぱりブランディングかなと。もったいないなと非常に思います。

【秦野ファシリテーター】

ありがとうございます。

実は時間がもう終了に近くなりましたので、私のほうで簡単にまとめさせていただきたいと思います。

今、「チャレンジ」という言葉がたくさん出てきました。皆さんご存じのとおり、小牧というのは「夢・チャレンジ 始まりの地 小牧」というのを掲げています。まさにチャレンジという言葉が小牧のブランドであります。

そうであれば、このチャレンジが始められると、皆さん全国から来てくださいよという懐の深さ、また応援できるような仕組みを作っていくと、産業的にも、住民自治の向上についても非常にいいのではないのかなという感じがしました。

一番大事なのは恐らく、さっき3つのコミュニティという話が出ましたが、やはりお住いの住民の方、また農業の従事者の方、工業団地もあるということなので、そういった方たちが一体どんなふうにかこの東部について思いがあるのか、こういうふうにしたいという夢とかチャレンジ精神をお持ちなのかと、企業にも市民活動団体にも SDGs というのが非常に重要なテーマになっており、推進されています。

それを進めることによって住民福祉が充実したものになってくるだろうと思っていますので、ぜひその三者のコミュニティが何か交わりながら、夢を互いに語り合いながら、このまちをどうしていくんだ、自分の将来どうしていくんだ、そんなことを語れるプラットフォームがあると非常にいいと感じました。

そのような形で実際に進んでいけば、小柳委員はお住まいですけれども、我々は東部に住んではいないのですが、おそらくそういった方たちが集まって夢を語り合う中でいいアイデアが生まれてくるのではないのかなと思います。

先ほど、SDGsNo.1 都市はどうだというような話もありましたし、スマートシティの例から、やはりいろんなところから注目される、人が集まる。それも小牧のブランドと関連性もあるのかなとい

う気がしました。

なかなかまとまらない議論で申しわけないですが、ぜひ今までの純住宅から脱却をされて、産学官連携を踏まえながら、何か新しい夢・チャレンジができるような東部であってほしいと感じました。

以上をまとめとさせていただきたいと思います。

皆さん、ご議論ありがとうございました。

それでは、次に、議題（４）その他に入ります。事務局よりお願いいたします。

議題（４）その他

【事務局】

次回の会議の予定でございますが、また改めて日程調整させていただいた上、開催通知をさせていただきますのでよろしくお願いいたします。

以上です。

【秦野ファシリテーター】

以上で、本日予定しておりました次第については全て終了いたしました。

本日は本当に円滑な会議進行にご協力いただきましてありがとうございました。

【山下市長(本部長)】

どうもありがとうございました。今日も熱心なご議論いただきまして、本当に素晴らしいいろいろな気づきをいただきました、ありがとうございました。

これで２回終わったわけですが、長い短いといえ、非常に限られた時間の中で非常に濃い議論をしていただいているということで感謝申し上げます。

戦略会議というのは全国でもあまりないと思います。市長が入って、専門家の方々やお地元の皆さんと公開でシナリオなし、フリートークで行う議論はあまりないと思います。私が最終的な責任者でありながら好きなことを言って本当にいいのかという思いもありますが、これは何か決める会議ではありません。ただ、この議論を通じて、私も最終判断をしていく上で、皆さんの知見をいただきながら、良いものを作っていきたいということでやらせていただいています。

今後の進め方について、第１回のときにまだ決まっていなかったけど大体このぐらいのスケジュールでという話をしました。決まっていない状況ですけど、何となく見えてきた方向性も感じました。事務局とまたいろいろと今日の議論を振り返って、また次のステップに向けて話し合いを進めてまいります。今日は時間がこれ以上ありません。また今後の進め方について、何かご意見があればぜひ事務局へお寄せいただければ、次回につなげていきたいと思っています。よろしくお願いいたします。

【秦野ファシリテーター】

ありがとうございます。

それでは、事務局。

【事務局】

長時間にわたりご議論いただきまして誠にありがとうございました。

本日の会議録につきましては、事務局にて作成次第、各委員にご確認をお願いしたいと思いますので、よろしくお願ひいたします。

それでは、これもちまして第2回東部まちづくり戦略会議を終了いたします。

どうもありがとうございました。

【了】